

国語科

〔I〕芥川龍之介『トロッコ』について

白井 宏

1. はじめに

かつての中学1年生用教科書において、(例えば、昭和38年1月15日発行の三省堂)『トロッコ』が、二カ所の削除部分を持っていたことは、周知の通りである。

それは、次の部分である。

A ただその時の土工の姿は、今でも良平の頭のどこかに、はっきりした記憶を残している。薄明かりの中にほのめいた、小さい黄色の麦わら帽、しかしその記憶さえも、年ごとに薄れるらしい。

B 良平は二十六の年、妻子といっしょに東京へ出て来た。今ではある雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然なんの理由もないのに、その時の彼を思い出すことがある。全然なんの理由もないのに？——塵労に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。
……

(以下本文引用は何れも現行の三省堂版による)

これらの削除について、原典を尊重すべきであるという、一般的な立場からの批判を、筆者はかつてしたことがある。(注1) さらに、この削除が、作品をどう歪めるかについての論が、従来無いわけではない。(注2)

それらを踏まえつつ、削除部分の正確な読み取りを出発点にして、この作品全体の、テーマ・構造等について考えていくのが、本稿の目的である。

(注1) 「中学校文学教育についての若干の基本的考察」(本校研究紀要第14集)

(注2) たとえば、熊谷孝『文体づくりの国語教育』三省堂など。

2. 「回想」という形式

この作品は、26歳の(ほんとうは、26歳よりも何歳か年嵩の、と言うべきであるが、いちいち煩雑であるので、便宜上、以下26歳の、とすることとする。)一人の、妻子ある男の回想という形式を採っている。

このことがはっきり現われているのが、前掲A・Bの二カ所であり、その二カ所が削除されると、回想という形式は、ほぼ完全に失われる。

形式ということにこだわるのは、この回想という形

式が、作品の構造やテーマを決定し、教室におけるディテールの読み取り方をも、規定すると思われるからである。

二カ所が削除されると、この作品は、8歳の良平とトロッコとの、少年物語に過ぎなくなる。従って、教室での読みは、次のようになるだろう。自分(学習者)と、あまり年令の違わない主人公の、各場面場面における行動や心情を正確に読み取り、時に感情移入をまじえながら読み進める。そして最後に、自分にもかつて同じような経験があったようだと考え、それを出し合って皆で話し合う。

ところが原典の場合、話し手は26歳の、いわゆるおとなであり、学習者とは、かなりの年令差が生じてくる。この年令差は、8歳と12歳(あるいは13歳)および26歳と12歳という、単なる量的な違いだけでなく、そこには、質的な隔たりも当然考えられねばならぬ。

従って、作品の読み方も、感情移入や、同種経験の掘り起しだけではすまなくなり、吉田精一氏のことばを借りれば、「実人生の象徴」といった抽象的なものにまで、高まり広がって行くし、(注1) 当然行かねばならないだろう。

つまり、回想という形式は、主人公の過去における経験を、トータルな形で一旦抽象化(典型化・象徴化)し、そのプロセスを経ることによって、こんどは逆に、読者ひとりひとりの内奥のより深い所へ、より鋭く食い入って行く、そういう性格を作品に賦与することになるのではないか。そういう読みを読者に要求するような作品にするのではないかというのである。

そのような視点からの作品分析は、次章以降に譲るとして、ここで一言付言すれば、このような性格を持つ小説『トロッコ』の読者として、中学一年生という世代は、やや若すぎるのではないか、筆者は最近そのようにも考え始めている。

(注1) 近代文学鑑賞講座 11. 角川書店 177 ページ

3. 省略部分Bの(つまりこの作品のテーマ)解釈について

省略部分Bについての、吉田精一氏の所説を見てみる。

この結末の数行は、芥川一流の「落ち」のにおい

が濃厚であるが、これがこの作のテーマになっていると考えられる。(中略)

ところで、この最後の数行は、いくぶん唐突で、つけたしの感じがしないでもない。単なる子供の心理の描写から来る淡白な味わいに飽き足らず、強いて一ひねりひねってみたのではないかという想像もされる。(あるいは、材料を提供してくれた力石青年への挨拶かも知れない)この作品のすぐれたところは、むしろ、思い出の部分である。(注1)

ここには、一種奇妙な撞着が見られるように思う。「テーマ」を書いていると考えられる部分が、「つけたし」のようにも感じられる(傍線は筆者)というのは、いったいどういうことなのだろうか。

これが氏の論の撞着でないとすれば、作品の欠陥を指摘しているのだろうか。作者の意図する「テーマ」が、読者には「つけたし」とも読めるのだとすれば、それは明らかに作品の欠陥であり、そのような作品は失敗作ということになるだろう。ところが氏は、同じ所でこの作品を、「小品としては上乘のもの」と評価されているのである。

この矛盾は、Bの部分に対する、氏の、読みの甘さ、つまりは作品全体に対する読みの甘さに、由来しているように、筆者には思える。

氏は、主人公である青年の、回想・記憶の性格について、次のように述べておられる。

(1) 幼時の記憶は、よその国からの便りのように、何か童話めいた色彩を帯びているものである。喜びも悲しみも、ぶどうの房の上にもうっすらとふいた白い粉のようなものでおおわれて、(2) 現実離れのした一つの世界の中で揺れ動いている。しかし、(3) かすかに、現在の現実の世界と呼びかわす何者かがある。日々たそがれのような薄暗い生活を送っている校正係にふとよみがえった記憶もこのようなものであろう。
(注2)

念のために、Bの部分を重ねて引用する。

良平は二十六の年、妻子といっしょに東京へ出て来た。今ではある雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。(ア) が、彼はどうかすると、全然なんの理由もないのに、その時の彼を思い出すことがある。

(イ) 全然なんの理由もないのに? — (ウ) 塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。……

吉田氏の所論には、ひとつの読み誤り(あるいは、読みの甘さ)と、そこから来る論理のあいまいさがあるように思われる。

読み誤りというのは、傍線(1)(2)の部分(以下、傍線は何れも筆者の付したものである)である。一般論と

してはともかく、良平青年にとって、幼児の記憶は、果して氏の言われるような「童話めいた色彩を帯びているもの」、「現実離れのした一つの世界の中で揺れ動いている」ものであるだろうか。そういう解釈はどこから出てくるのであろうか。

筆者には、良平青年の記憶は、「童話めいた」ものでも、「現実離れのした」ものでも、恐らくなく、もっと深刻な、現実と、より深いところで強くつながっているものであるように思われる。

論理のあいまいさというのは、前述の読み誤りからくるものである。それは、傍線(3)の部分に見られる。つまり、現実と、過去の記憶との関係が、はっきりと述べられていないという点である。「かすかに」「呼びかわす」とか、「ふとよみがえ」というのでは、論理的に明快であるとは、決して言えない。

Bの部分の氏のように読むとすれば、確かにこれは、氏の言われるように「つけたし」のようなものになるであろう。そして、この部分を「テーマ」と考えることは難しいであろう。

断定的に言えば、氏はBの部分の、傍線(ア)のところまで読んで、後の部分を精密に読むということをしなかったのではないだろうか。確かに(ア)のセンテンスまでで終わってれば、氏のような解釈になるかもしれない。

ところがよく読めば明らかのように、(ア)のセンテンスは、直後に否定されているのである。傍線(イ)のセンテンスの文末に付された疑問符は、疑問というよりはむしろ、反語の意であり、かなりはっきりと、(ア)のセンテンスを否定することを表していると考えられるのである。つまり、彼が幼時の出来事を思い出すのは、「何の理由もない」のではない。「理由」はあるのである。

さらに、傍線(ウ)の部分は、問題の所在と、この作品のテーマとを、集約的に表している部分であると考えられる。

この部分の意味は、主人公の青年が、かつての場面を、「回想」しているのではない。少なくとも、単に回想しているのみではない。「薄暗いやぶや坂のある道」は、「塵勞に疲れた彼の前に」「断続している」のである。

「その時のように」という措辞は、8歳の時に自分の前に続いていた「薄暗いやぶや坂のある道」と同じような「道」が、26歳の自分の前にも続いている、そう解釈されるほうが自然であろう。

従って、傍線(ウ)のセンテンスの直前に置かれた「—」の意味は、回想の中味を述べるために置かれたと考えるよりも、26歳の彼が、幼時の彼を思い出すことの理由を述べるために置かれた符号である、そう考え

る方が、文脈的に言っても自然であろう。

では、その「道」とは、どういう「道」であるのか。何ものかに裏切られ、独りで、心細さに必死に堪えながら走り続ける「道」である。かつての、そういう意味での「道」が、現在の良平の前にも、続いているのである。

さらに言えば、8歳の時の良平の「道」は、実は果てしなく続く「道」ではなかった。ともかくも自分の「家」へつながっていた。そしてそこには、「良平の体を抱えるように」してくれる母も、父も、近所の人々もいた。そこは、「いくら大声に泣き続けても、足りない」ほどに手放して泣ける場所であった。

ところが、26歳の、現在の良平の前の「道」は、そういう「家」へつながっているものかどうかかわからない。心細く、薄暗く、ただただどこまでも果てなく続いているかのように見える「道」なのである。

Bの部分は、このように読むべきだろうし、こう読むことによって初めて、この部分が、実人生の象徴として、この作品全体のテーマになり得るのだと思う。

一言付け加える。

現行の三省堂版の教科書においては、この部分(すなわち作品全体)を、次のように読ませたいらしい。

塵労に疲れた良平は、過去を回想することで、明日を生きていくエネルギーをくみ取る。(中略) 少年時代の精いっぱい行為が、大人の良平を励まし、支える力となるのである。前近代と近代とが絡まり合う時点での泣きたい状況、泣く以外どうしようもない状況がそこにある。が、泣かずにこらえていくことのたいせつさを、また、単にこらえるだけでなく、事態を切り開いていくことのたいせつさを、この作品は切々と訴えている。(注3)

「明日を生きて行くエネルギー」とか、「事態を切り開いていくことのたいせつさ」とかという読みは、いったいどこから出てくるのであろうか。そういう読み方は、いわゆる「教育的」であるのかもしれないが、作品から遠く離れた、もっと言えば、作品を歪めた、一種の道徳読みに過ぎないだろう。

良平の回想は、単なる詠嘆ではない。そして、処生の教訓でも無論ない。

現在の現実の前にも続く、心細く暗い一本の道が、実はかつてのあの道と同じであり、そして現在の現実の道には、かつてのような「家」は見えない。

いわば、状況によって拒絶されている、そういう暗い、自己の存在観、人生認識、それがこの作品のテーマである。その象徴として、少年時の回想・思い出があるのである。

(注1) 近代文学鑑賞講座 11. 角川書店 175 ページ

(注2) 近代文学鑑賞講座 11. 角川書店 175 ページ

(注3) 現行教科書の学習指導書 356 ページ

4. 作品の構造分析

状況によって拒絶されているという、暗い人生認識がこの作品のテーマであり、少年時の思い出はその象徴である、と述べた。ここでは、それにもとづいて、作品の構造を分析検討してみたい。

この作品には、少年良平の、トロッコに対する強いあこがれと、その挫折からくる苦い思いが、すぐれた描写力でもって描かれている。

8歳という年齢は、一般に幼児期から少年期への転換期だと考えられている。小学校入学、主としてそれを契機として、大人の世界、現実の世界というものに、次第に触れ始める時期である。それまでは、遊び相手はおもちゃであり、外出は親と一緒にあり、いわば、完全に保護された(管理された)、枠の中での生活である。

そういう良平の目の前にトロッコが現れる。おもちゃの汽車は、精巧ではあるが絶対に安全であり、部屋の中にセットされた有限の長さのレールの上しか走らない。しかし、現実のトロッコは、その枠をはみ出しているという意味で、良平にとって、まさに現実そのものである。だからこそ、この上なくまぶしく光り輝き、強いあこがれを少年に抱かせるのである。トロッコは、良平の目の前に現れた、初めての現実であった。もっと正確に言えば、トロッコを前にして、良平は初めて、現実というものを認識する能力を持ったのである。現実というものを認識する能力を持ったときに、最初に目の前に現われたのがトロッコであった。良平は初めて、少年になったのである。

あこがれの強さは、「土工になりたいと思うことがある。」「せめては一度でも、土工といっしょにトロッコへ乗りたいと思うこともある。」「乗れないまでも押すことさえできたらと思うのである。」という形で、表現されている。

しかしこのあこがれは、不幸にも挫折し、苦い思い出となる。その挫折の様子が、この小説の中心になっている。

一読明らかなように、この作品には、二つの事件、出来事が描かれている。一つは、「このやろう！ だれに断ってトロにさわった。」、今一つは、「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するぞら。」、という、何れも土工のことばによって終わっている。

冒頭に掲げた、A・Bの部分が削除されたテキストの場合には、それぞれの場面での主人公の気持ちを、細

部の精密な読み取りを積み重ねることによって、分析理解すれば、それで充分であるかもしれない。

しかし、削除部分が補われ、回想という形式が顧慮され、Bの部分テーマとして考える場合は、やや様子が変わってくる。この二つの出来事は、決して同じようなことのくり返しではなく、前者よりも後者の方が、より衝撃が大きかったというような、比較の問題でもない。

二つの事件は、正確にこの順序で起こり、しかる後に、二つが合わさることによって、一つの真の意味の全き「経験」となる。そういうふうに使われねばならない。

最初の出来事は、確かに、良平に、現実というものへの恐怖を与えた。しかし、この経験だけでは、自分が現実から拒絶されている存在であるという確信を持つには、十分ではない。「それぎり良平は使いの帰りに、人けのない工事場のトロッコを見ても、二度と乗ってみようと思ったことはない。」と言いながらも、「そののち十日余りたってから」「トロッコのそばへ駆けて行」って、「『おじさん。押してやろうか。』」と、再びトロッコ（現実）への接触を試みているのを見ればわかる。

つまり、誤解を恐れずに単純な言い方をすれば、次のようである。現実からの最初の拒絶は、現実全体からのそれではなく、いわば現実全体の半分の部分からの拒絶であった。例えば、土工たちのすべてが、「このやろう！」とどなるわけではないだろう。（と、その時良平が考えたというわけではもちろんないが）

果して良平は、次に、「親しみやすいような気」がする、「やさしい」土工達と出会うことになる。この土工達との出会いは、良平に一瞬の幸福をもたらす。あこがれが実現されるのである。つまり、現実の世界が、良平を受け入れたのである。

しかしそれも長続きせず、「われはもう帰んな。……あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するぞら。」という、いかにも優しくそう、しかしそれだけに残酷な拒絶によって終わる。

結局良平は、どなるような怖い土工からも、親切そうなやさしい土工からも拒絶されてしまうのである。つまり全ての土工から拒まれるのである。このようにして現実全体と良平との断絶は完結し、現実から拒ま

れているという良平の思いは、確信に至るのである。こんどこそ良平は、二度と再びトロッコに近づこうという気は起きないであろう。

良平の経験は（この作品は）こういう構造を持っている。前にも述べたが、8歳の彼がこのように考えたということでは、無論ない。26歳の良平の中で、かつての記憶が、こういう形でまとめられた、ということである。

回想というものが、事件当時の事実の中から、回想している時点の状況や意識によって取捨され、意味づけられて、ひとつの経験として形象化されたものであるということは、見易い事実であろう。それぞれの事件の終わりの部分に、いずれも回想であることを表わすパラグラフが挿入されていることは、意味のあることなのである。

蛇足ながら、回想時点の状況とは、次のようなことであろう。文学者か、あるいはジャーナリストたらんと夢見て上京した良平の前に用意されていたものは、わずかに校正の仕事にすぎなかったのである。

5. おわりに

独断的な読みになったかもしれないが、筆者には、次のようにも思えるのである。『羅生門』『鼻』から、『或阿呆の一生』に至る、芥川文学の一貫したテーマも、そして、36年間という決して長くない芥川の生存のテーマも、「現実から拒まれている」そういう意識、認識だったのではなからうか。

〔追記〕

第一節の末尾に注記した熊谷孝氏の所論を引用しなかったのは次のような理由による。

氏の所論の主目的は、『トロッコ』の作品分析よりも、教材化の論理の追究にあるということ。従って、さまざまな創見と示唆に満ちてはいるが、『トロッコ』論としては、ややまとまりを欠くと思われるからである。たとえば氏は、良平の苦汁に満ちた過去のできごとを、「少年時代の美しい夢」と読む読み方に与して居られたりして、所論の他の部分とは、どうしても背馳するように思われるのである。